

第29期社会教育委員の会議

第2回定例会

議事録

令和2年11月18日

【１】 開催日時

令和２年１１月１８日（水）１７時４０分～１９時３０分

【２】 開催場所

尾山台地区会館大会議室

【３】 講師

（一社）おやまちプロジェクト 代表理事 高野 雄太氏

【４】 出席委員

坂倉委員（議長）、小泉委員、鍵和田委員、村上委員、権田委員、山崎委員、吉岡委員、新海委員

【５】 出席職員

教育委員会事務局

田村生涯学習・地域学校連携課長、大井社会教育係長、御園生社会教育担当係長、清野社会教育係主任

【６】 傍聴人

無し

【７】 次第

１ 概要説明および意見交換

- （１）「おやまちプロジェクト」発足経緯
- （２）現在の活動状況
- （３）プロジェクトの効果と課題
- （４）活動を通して連携・協働に必要なものとは
- （５）意見交換

２ その他

○議長 皆さん、こんにちは。今日はお忙しいところ、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

《歩行者天国での活動の様子を見学》

今、少しホコ天の様子を見てきたところですが、この後、「おやまちプロジェクト」の経緯と活動概要などを、代表理事の高野雄太さんに伺い、その後、実際見た感想も含めて、我々のテーマである学校と地域の連携について意見交換をしていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

では、何かお気づきになったり、面白いと思った点とか、いかがでしたか。

○委員 学生さんと女の子のグループのところで、好きな音楽をかけながら、スマホのスピーカーを立てて遊んだりとか、それぞれが好きなことを自由に話しながら仲よくなっている感じで、学生さんが、だんだんこういう形で増えてきたんですよという話とか、どの立場でということなく、一緒に楽しんでいる感じがすごくいいなと思って見ていました。すごく楽しそうにしているということが印象に残りました。

○議長 ありがとうございます。

立ち話でちょっと伺いましたけれども、学生も、特に教育学専攻でもなく、都市生活学部は地域づくりの学部なので、もともとは商店街の街路空間をどういうふうに生かすかみたいところだったんですが、蓋を開けてみると、ちょうど4時、6時、子どもが帰ってきて、晩御飯前の時間で、コミュニケーションは非常に濃密で、顔見知りができると、そういう関係の中で、お互いに楽しみながら過ごしている感じですね。

○委員 駐車場で遊んでいた3人の女の子に、委員からの質問で、児童館へ行かないのかという話があったので、児童館は遠い、今は習い事の帰りだというんですね。学童は行っていないと言っていましたね。BOPはどうなのと言ったら、その答えはなかったんですけれども、多分、習い事があって、終わってから、あそこで遊んで帰るというパターンで、多分お母さんももう全部それは知っていて、そこにいれば安心だというのがあっていいでしょうね。何もなければ親は、暗いところで心配だから、こういうところがあれば、安心して行けるんだなという。

ただ、ちょっと心配だったのは、男の子たちがそこで駆けっこしていて、ぶつかったりしていたので、保険がないということで、プレーパーク方式だとは思いますが、自己責任で。ただ、結構学生さんにも聞いたんですけれども、擦り傷とか、そういうのは結構あるんじゃないと言ったら、時々ありますという話でした。その辺の安全の確保が課

題かなと。

○委員 とてもいい商店街だと思いました。自転車の無断駐輪とかが全然なくて、本当に整然とした感じの商店街で、地域の方たちが、この商店街をそういうふうにしていらっしゃるというのが、よく分かりましたね。

子どもたちも、習い事があると友達となかなか遊べない。お約束ができないけれども、習い事の帰りに30分とか15分とか、ちょっとの時間でもここに寄ると誰かがいて、少しの時間でも人と関わることができるのがとてもいいし、今は兄弟が少ない。兄弟という年齢差じゃなくて、小学生と大学生のお兄さん、お姉さんという、その感じがとてもいい。お父さんやお母さんみたいな大人ではない、先生みたいな感じでもなく、本当に憧れ対象になるような感じの人たちと関われるというチャンスが、すごく財産になるんじゃないかなと。学生さんたちもボランティアですよ。

○議長 そうですね。あれでお金がもらえるわけではない。

○委員 そうやって多くの子どもたちに関わっているというのは、経験としては今後に生きていくんじゃないかなと思って拝見していました。ありがとうございます。

○委員 引っ越してきたばかりで、何も分からなくて、知っている人もいないという家族の方がいらしゃった。今、核家族で、子育ても相談相手がいない、1人で悩みながら育てているという人たちも結構いる。そういうときに、まちの情報も得られて、知り合いもできて、そういう機会が得られる場所ということで、家族の皆さんとか御本人さんたちが、その気があれば、その関わりを自ら持っていけるという、何かそれが自然にできる場所という意味では、すごくいい感じがあるなと。

すごく今、子育てに悩んでいる方が多いですから、そういう点でもいい出会いになるんじゃないかなと感じました。

○議長 来てくださる方にお話を聞いていただいて、ありがとうございます。

○委員 ただ、まだ大きな事故がないかもしれないですが、気をつけていても起こるときは起こるかもしれないということを考えると、対策とか保険とかは課題として取り組んでいただいたほうがいいのではないかなと。

○委員 どうしても教員の視点で僕は見てしまうんですけれども、すごくいい空間だなというのを感じました。というのは、大人ってどうしても30分とか1時間とか、そういう単位、長さでいろいろ考えてしまうと思うんですけれども、子どもって3分あれば遊ぶので。5分でも、本当に短い時間でも遊びたがるので。ちょこっと寄れるという感じがいいなと

いうのを、すごく思いました。ちょこっと寄れて、自分の都合に合わせてそこにいられる。例えば、習い事があって、その帰りにちょこっと寄って、何時にお母さんが迎えに来てというような、自分で自分の時間をやり繰りできるというスペースで、すごくいいなと思いました。例えば学童、BOPとかというのは、何時帰りとか決まっていたり、自分の都合でというわけにはいかなくて、この時間は外で遊んで、この時間は部屋の中でとなってくるんですけれども、それとやっぱり大きく違うのが、すてきな空間だなと思いました。

それから、もう1つは、やっぱり僕も安全面のことが、すごくこれからの課題なのかなということは感じました。保険がない、入っていない子たちがこういうふうに寄ってくる場所だから、保険をかけるのはなかなか難しいんでしょうけれども、学校という場の感覚からすると、保険がなくて、ああいうふうに走り回って、コンクリの上で遊んでというのは、ちょっと、どきっとするような部分があったり。だから、安全面の確保は課題だなと思うのと、一方で、これが保険とか何とかと言い出しちゃうと、物事ってつまらなくなっていくちゃうのかなというのもすごくあって。自分が子どもの頃を考えると、空き地ばかりだったので、いろんなところに行って野球をやってと。そこに保険という意識は、もちろん自分の親にもなかったし、何かあれば自己責任という感じだったんですが、それが現代の社会の中でどれくらい通用するのか。親御さんは、預けているのは、そういうものがなくても安心してということだと思いますし、十分に自己責任という意識もあると思うんですけれども、そうじゃない御家庭中にはあるのかなというところが気になっていて。だから、楽しくこの活動が続けていきつつ安全面を確保してというのが、なかなか難しいところなんだろうなと思いました。

○委員 今のお話は、すごくよく分かって、自分も学童に関わっているんで、さっきの駐車場で子どもが走り回っていて、コンクリートのところで転んだらどうしようと思うんですけれども、実は、子どもはほとんどの方が保険に入っています。けが保険とか、親が子ども保険に入っているんで、主催する側が何も保険をかけなくても、ここで遊ぶときには皆さん、御自身のお子さんに保険をかけてあげてくださいねという呼びかけだけで、共済とか、けが保険とか、あと、例えば人を突き飛ばして転ばせちゃったら、それも賠償責任の保険も今ありますので、子ども保険は月に1000円ぐらいで、賠償も百何十円のプラスとかでできるじゃないですか。自転車の保険も含めて。やっぱりそういうものの意識を親たちも持つこと。自分の子どものことは自分でやるというのを植え付けるためにも、その紹介ぐらいはやっていただければ、もうそれで十分じゃないかなと思いました。

○議長 大学生はかかっていますね。本人でかけているのと、学外での活動の申請と、プラスアルファの何か賠償のを、何か壊しちゃったりとかした場合のプラスの保険をかけていますね。

でも、それを親御さんに、子どもさんにも、そういうものをちょっと配慮してくださいねみたいなものを言うだけで、大分安心感は違いますよね。

いかがでしょうか。もし何かなければ活動の紹介を、まず聞いてから、その後またぜひディスカッションさせていただければと思います。

「おやまちプロジェクト」という、この委員会のテーマ自体は、学校と地域の開かれた関係、協働というものをどういうふうにつくっていくのかということなので、今日、見ていただいたのはごく一部で、中でも大学生が中心になって、夕方、子どもの居場所にもなるようなホコ天の活動ということですが、それでも、「おやまちプロジェクト」自体の発足は、いろいろな経緯があり、活動自体も、もう少し広がりがあって、学校との連携というのいろいろな形でありますので、そういった背景も含めて経緯と、どんな活動をされているのかを高野雄太さんから伺いたいと思います。

高野さん、今日はよろしく願いいたします。(拍手)

○講師 よろしく願いします。ありがとうございます。

今、皆さんから、いろいろ感想やお考えをお聞かせいただいて、すごく勉強になりました、本当に10分ぐらいだったと思うんですけども、例えば今の安全面のこととかも、最近ずっと気になっていたんですよね。気になっているんですけども、どう手を打っているのか分からないというか。でも、それぞれのプロでいらっしゃる方から、御指摘いただくと、やっぱりきちんと考えなきゃいけないんだとか、大変勉強になりましたという感じなんですけれども、ここからは、「おやまちプロジェクト」のお話をさせていただけたらと思います。

僕が「おやまちプロジェクト」の話をするときに、いつもこのお話からさせていただくんですけども、「おやまちプロジェクト」というのは地域課題を解決するということを目的に、大上段に掲げているチームではないです。なので、課題解決から入っていないチームです。こういう話をすると、課題解決を軽視しているんじゃないかみたいにとられてしまうときがあるんですけども、全くそんなことはなくて、すごい大事だと思っています。ただ、それだけでまちでの暮らしが豊かになっていくわけではないなというのも一方であると思っています。

なので、課題解決というのは、まちで暮らす中でのベースの部分でとても必要なこと。でも、それだけじゃなくて、よりよい暮らしをつくっていくために、例えば、お隣さんたちちょっとした挨拶ができたとか、そういう日常のちょっとした幸せがまちでの暮らしを豊かにしていくので、こういうことをもっともっと増やせるようなアプローチがまちづくりの中にもあっていいんじゃないかなと思って、取り組んでいるのが私たちです。

僕たちの中では、こういう考え方が共通認識として、すごく大きなくくりであります。

もっと大事にしているのは、暮らしというのは人から与えられるものではなくて、自分たちでつくるべきものだと思っていますし、そのつくること自体がすごく楽しいことだという、この考え方をとても大事にしています。なので、やらなきゃいけないことではなくて、やりたいこと起点で僕たちの活動は全てスタートしていくということです。

今さらなんですけれども、自己紹介を改めてさせていただきます。

高野といいます。先ほど御覧になっていただきましたお店の3代目なんですけれども、商店街の理事をやらせていただいておりますし、今は中学校のPTA会長も、実はやらせていただいております。おととしと、その前と、小学校のPTA会長もやっていました。

尾山台は、今、見て、体感していただいたように、駅の周りに商店街があって、実は4つ商店街があるんですけれども、その商店街を中心に、そこから住宅街が広がっているというまちです。

僕が何でこんな活動をするようになったのかということなんすけれども、今、お見せしたように、そもそも自分自身がこのまちで生まれ育っているということもあります。まちのいろんな役職をやらせていただく中で、もともと地元で友達がたくさんいるわけなんですけれども、それ以外のパパ友とか、ママ友とか、商店街の先輩方とか、もしくは町会の方とか、あらゆるまちの方々と接点を持っていく中で、尾山台という自分の生きてきた、暮らしてきたまちが、どんどんいいなというふうに再認識、再確認していきました。

特に、尾山台での子育ては、すごいやりやすいというか、いい環境なんですよ。でも、このいい環境って一朝一夕にできるものではないですよ。まちは本当に長い年月をかけていいまちになっていくので、僕もその中に、たまたまいらせていただいていると。なので、先輩たちが築き上げた尾山台といういいまちを、僕のところで悪くしては申し訳ないというか、僕も、よりよくして次の世代に引き継いでいかなきゃいけないなというように思いが、いつしか芽生えまして、7年ぐらい前からまちづくりの勉強を個人的に始めました。

「おやまちプロジェクト」にどう至ったのかという話ですが、まちづくりの勉強をする
と地方の事例がすごく多く、地方は大きな課題が目の前にありますよね。もうまちとして
なくなっちゃうみたいな話がいっぱいあるわけで、東京はどこまで行っても人口流入がま
だありますし、特に世田谷なんて、どんどん人口が増えていますから、まちとしての大き
な課題って、そんなにないですよ。課題がないというのは、むしろ、いいものがいっぱ
いあるということなんですけれども、人口が増えているし。ある程度、富裕層の方々が住
んでいらっしゃるの、治安がよかったりとか、教育水準の高さとかもあったりすると思
うんですけれども。または、環境面もとてもいいまちであるということで、あるときに、
課題解決ではないアプローチが、このまちの新しいまちづくりとしてあってもいいんじや
ないかなと。まちづくりの勉強をしていく中で、あるとき、自分の中で気づきがありまし
た。これが「おやまち」につながっていく気づきなんですけれども。

これまでのまちづくりというのは、大きなお金をかけて、ある意味、非日常をつくる。
再開発とかもそうですよね。土木中心のまちづくりというのは大きなお金をかけてやっ
てきたことなんですけれども。もしくは、イベント事業とかも同じかなと思っています。で
も、これからの時代というのは、今そこにあるものをうまく活用して、日々の日常の暮ら
しの豊かさを、より少し大きくしていくという。いきなりドーンと大きくするんじゃなく
て、少しずつ少しずつ、紡ぐように自分たちで暮らしを豊かにしていくというのが新しく
必要な考え方なんだなというのを、勉強する中で教えてもらいました。

もう1つは、1人の力はちっちゃいので、仲間を見つけてやりましょうということを学
んだんですけれども、これは、商店街の人たち、町会、PTAの中だけでやるんじゃなく
て、得意分野の違う人たちと、属性の違う人たちと一緒に仲間になってやっていく。要は、
その境を越えていくということです。この、今あるものを生かすという視点と、属性の違
う人たちと仲間になって一緒に協働していくんだという、この2つの視点を僕は学んで、
課題解決ではない、尾山台の尾山台らしいまちづくりの在り方というのをつくっていき
たいと思うんですけれども、いきなり仲間ってできないですよ。

まちを歩いている人に「仲間になってください」と言っても気持ち悪いだけなので、こ
れはどうしたらいいかなと思ったんですけれども、尾山台は東京都市大学を持っているま
ちじゃないかと、ひらめいたんですね。4年ぐらい前にひらめいて、2016年の10月に東京
都市大学に電話をして、こういう考え方を持っているんですけれども、誰かいい先生を紹
介してくださいというふうに事務の方にお問い合わせたら、ここにいらっしゃる先生を御紹介

いただけたと。

先生は先生で、後ほど質問をしていただいたらいいかもしれませんが、コミュニケーションを専門とされている方ですから、学生たちがただただ、駅と学校を往復するだけで、何かまちの人たちとコミュニケーションを取れていないという現状を憂いていたということがあったそうで、すごく意気投合して、では、何か一緒にやってみましょうよということで、今日御覧いただいた活動につながっていくような、これが第一歩の取組でした。

これは、2017年の4月ですね。先生の研究室のゼミを歩行者天国で開いちゃうという光景です。だから、これもいきなり学生たちがイベントを押し込んで、ドーンと非日常をつくるんじゃなくて、歩行者天国という商店街が有していた、既にそこにある空間ですよ。そこに大学の教室の中で行われていたゼミを、ちょっと持ってきただけで、こういう場をつくってみたということです。

これは明らかに異質な感じですよ。変な感じがすると思うんですけども。周りを歩いている人たちも、すごくけげんそうな顔をして見るんですけども、(パワーポイントの映像) ホワイトボードのところに都市大と書いてあるんです。東京都市大学の学生たちなんだ、ということが分かった瞬間に、誰も文句を言わないんですよ。尾山台の人たちって、東京都市大学を自分のまちの大学だとちゃんと認識していて、東京都市大学だったらここでこれをやってもいいよねと許容するというのが、よく分かったんですね。これはすごく大きな発見でした。

次にやったのが、青空教室といって、先生にまちの大人たちの前で講義をしてもらうということをやりました。

○議長 よくこんなに人が来ましたよね。

○講師 そうですよ。しかも、この日、雨降っていたんですよ。

これは今日の建物の入り口のところなんですけれども、エントランスで。僕はこのときPTA会長をやっていたので、PTAのお母さんとか、町会の役職のある方とか、いろんな方に声をかけてここに集まってもらって、あとは道行く人が、何か変なことやっているとって立ち止まってくれるわけですね。ちゃんと看板を立てておいて、東京都市大学の誰々先生が、今、まちの講義をしていますと。そうすると、ああ、東京都市大学ねと言って、みんな見ていってくれる。

こういう活動を通して分かったことは、やっぱりこれまでつながっていなかったもの、

地域資源だとか、場とか、あらゆる地域のリソースですよ。そういったものを新しくつなげるといのか、つなげ直しといのか、言葉はちょっと分からないですけども、とにかくつながっていなかったものをつなげてみると、ある化学変化が起きて、すごく面白いことが起きるといことが、よく分かりました。

先生と、ある種ちょっと遊んでいるようなことを学生たちと共にやっていたら、ちょっとずつ縁がつながり出して、あるとき、皆さんよく御存じの方が映っていると思うんですけども、当時の尾山台小学校の校長先生、現教育長から電話がかかってきまして、2017年の6月に。最近大学の先生と面白いことやっているらしいじゃん、その大学の先生を連れて一回校長室に来てよと言われて……。

びくびくしながら行くわけですけども、先ほどお見せした青空教室に参加されていたPTAのお母さんたちが、こんな面白いことがあったよというふうに校長先生に伝えてくれたんですよ。そこで先生の耳に入って、呼び出されるんですけども、そこに、もう1人、慶應大学の大学院の教授の方なんですけど、先生はもともと慶應にいらっしゃったので、もともとお知り合いで仲がよかった。その方は、当時、尾山台小学校のおやじの会に所属されて校長先生とも仲がよかったし、僕もお名前は存じ上げていて、皆さん、ちょっとずつつながりがあったということですね。

立場で言うと、商店街とか小学校、大学、あとは地域の大人ということで、とにかく一回、4人で集まって話をしようということで集まりました。

先生の背景としては、先ほどお伝えしたようなことがありますし、校長先生といえばキャリア教育ですので、キャリア教育をもっと推進していきたい。要は、教室の狭い空間だけでは、もうこれからの教育は無理ですと。まちに開いていかなきゃいけないし、まちの大人にもっと関わってもらわなきゃいけないということですね。

全然背景の違う4人なんですけども、つながりとか学びというキーワードに、この4人の思いが集約されていって、とにかく4人で何かやってみましょうということで、まず、キックオフとして、まちの未来を考えるワークショップというものをやりました。

場所は尾山台小学校の図書室です。ここに集まっている大人は、町会の会長さんとか商店街の理事長さん、もちろんPTAのお母さん、おやじの会の方もいますし、世田谷区の行政の方もいらっしゃっていました。また、東急電鉄の方とか、あとは大学生も来ていましたね。とにかくまちのありとあらゆるステークホルダーに集まってもらって、まちの歴史を少し学んでから、まちのこれからを考えるワークショップをみんなで行いました。

この会がすごく盛り上がって、僕の中ですごく手応えがあった。僕は尾山台のことが大好きなんですけれども、みんな尾山台のことがすごい好きということが、すごく分かったことです。

これだけまちに対する思いを持っている皆さんって、やっぱり恥ずかしいし、まちに対する思いを誰かに伝える機会って普段余りないんですよね。これだけ思いのある人たちがいるし、一芸に秀でた方が、わんさか住んでいるわけですよね。世田谷なんて。だから、そういう人をつなげていったら、もっともっとこのまちの暮らしがよくなるんじゃないかという手応えが、このときありました。

なので、この4人でとにかくやってみようということで立ち上がったのが、「おやまちプロジェクト」ということです。

ここからは、どんなことをやっているのという話とか、あとは、コロナの中でどんなことが起きているのかみたいな話ができたらと思うんですけれども、どうしましょう。このまましゃべり続けるほうがいいですか。

○議長 いかがですか。ここままで何かあればぜひ。

○委員 先ほど、1回目の商店街だとか町会の方とか、たくさんお呼びになったとき、どうやって声をかけたんですか。

○講師 それは人海戦術と申しますか……。

○委員 こんな会をやるから来てください、知り合いが知り合いを呼びみたいな感じで。

○講師 そうですね。特に集客は、僕と、僕の母と、校長先生が主に担当。もともとつながりを持っているのがこのメンバーなので。

皆さん、いい方ですよね。呼んだら来てくださるわけだから。

○委員 青空教室のレクチャー。かいつまんで、どんな内容というか。

○議長 私にとってもすごく気づきだったんですけれども、要は、30年後にこのまちでどんなふうに暮らしたいですかみたいな。商店街のイベントだったんですね。本当は商店街のことを話すべきなんだけれども、どんどん商業はインターネットに移っていくので、昔あった商店街のにぎわいをこれから取り戻そうとかと言っても全然無理だから、そういう話じゃなくて、このまちで皆さん、ずっと暮らしていくとしたら、どんなふうに暮らしていきたいですかみたいな投げかけをしたんですね。

だから、私がレクチャーというよりも、今、状況はこうなっていて、この先どうなっていくだろうみたいな話をした。聞いていたのがお母さん方で、面白いと思ってくださった

んですね。何でかという、商店街を何とかしましょう、あるいは、まちづくりを頑張りましょうと言っても、それは商店街の人がやることだよなみたいに思っていたんだけど、30年後どうですかと言われた瞬間に、あっ、うちの子がもしかして、結婚して孫ができているかもしれないみたいなことを、何か想像されたらしくて。そうすると、まちの未来を考えるというのは、自分のことだみたいなことを話されていました。それを、何か面白い話を聞いたという形で校長先生に垂れ込むということになったと。

普通に暮らしている人って、まちのことを考える機会って余りないんだけど、何かきっかけさえあれば自分の未来、暮らしの延長として、想像してもらえることを、私も学びました。

○講師 おうちを御購入されている方もたくさんいらっしゃるので、やっぱり30年後というと、老後というか、自分がどうまちで最後の人生を締めくくっていくのかみたいなことは、かなり具体的に考えることができたという話をそのお母さんとしたことを、今、思い出しました。

○委員 4人でお集まりになるのは、どんな感じで。定期的に集まったりとか、どういうふうに集まっているんですか。

○議長 最初の頃は2か月に一遍とか集まる感じだったかな……。

○講師 4人だけで集まったのは多分本当に数回ですね。

○議長 そうです。

○講師 その後、もう大学生もいた。どんどんどんどん仲間が増えていってという感じがすよね。定期的にはしていないですね。

○委員 4人が会ったことが、何か1つのエポックで進んだという感じがすよね。まちのことをよくしようと考えているのは、商店街も、町会も、はたまた学校もそうだったけれども、それぞれお互いを知らず動いていたのが、そこで何かパンと一瞬、集まったという。これは偶然か、必然か。すばらしい一瞬だったなと感じますね。

○講師 そうですね。そのときは全くそんなことは思っていないんですけども。今から言うとそうですね。

○委員 結果、今から言うと、そこが一番の瞬間。そこからまた始まった話が、これから聞けるわけですね。

○講師 そうですね。では、いい振りが来ましたので、進めたいと思います。

先ほどの取組をデザインプロジェクトと呼んでいるんですけども、次にやったのも、

同じようなというか、それをさらに広げた取組で、小学生が中心になって、小学生からお年寄りまで幅広いまちのステークホルダーを、大人だけじゃなくて、小学生とか中学生も入って、みんなで1日かけてワークショップ、フィールドワークをしたという取組です。

これは午前中に尾山台の歴史をしっかりとみんなで学んで、お昼御飯を食べた後に、班ごとにまちに飛び出して、今のまちを見るわけですね。これがすごく不思議で、しっかり歴史を学んでからまちを見ると、これまでと見え方が変わってくるんですよね。当たり前にあると思っていたものが当たり前ではないわけで。だから、すごく気づきが子どもたちも多かったという感想がありました。

これは、1つ、写真をキーにされていて、まちの古い写真を町会の方とか長く住んでいらっしゃる方々から集めておいて、その写真の同じ場所、同じアングルから今の写真を撮るというワークショップをやりました。今、手元に持っているこの写真が、皆さん、帰りに見ていただきたいんですが、大きな木があるんですけども、この木がすごいちっちゃいんですよ。これが30年以上前の写真で、できたころの写真ですね。30年後には、こんなに大きく育っているというのがあるんですけども、そうやって歴史という流れがあるということを体感する。まちのいろんなところを見て、歩いて、商店街のおじさんに昔の話を聞いたりとか、フィールドワークをしました。その日一日、学んだことを小学生たちが新聞にまとめて、まちの大人たちの前で発表するというような取組です。

今年もこれはやろうとしたんですけども、コロナでできなかったんですよ。すごく残念だったんですけども、7月の、夏休みに入ってすぐ予定していたんですけども、やりたいなと思っています。

これは割愛してもいいかもしれませんが、今、見ていただいた取組です。

先生から先ほど御説明があったように、365日、元旦も、毎日4時6時に歩行者天国です。本当に、自転車や歩く人が、ただただ通行する場所になってしまっていたんですね。今もう水曜日以外はそうです。でも、僕が子どものころは、本当に子どもたちの遊び場というか、大人といえば、特にママさんたちの井戸端会議が至るところで起きるという。その周りで子どもたちが遊んでいるという感じですね。

なので、こういう活動。4時になった瞬間に人工芝を敷いて、机、椅子を出すと、こういう光景が広がっていくということです。

夏にはプールも出します。

こういうのも、すごくいいですよ。

そのほかにも幾つか活動を御紹介しますが、これは、商店街にあるワイン屋さん。毎週水曜日が定休日で、毎月第4水曜日の夜、お店をお借りして、ワインを飲みながら大人の緩やかなつながりをつくる。お友達をつくりましょうと。ただの飲み会ではない、でもイベント過ぎないみたいな取組を、コロナ前は毎月1回やっていました。

必ず商店街のお店でテイクアウトできるものを買って、おつまみを一品決めて、それに合うワインということで。そうすることによって、ちゃんと商店街のお店のことも紹介できるので、後日行っていただけたりもするということですね。お酒が飲めない方も、こういう場があったら行ってみたいということで、本当にたくさんの方がいらっしゃって、大体毎回30人ぐらい来ていましたね。ここで新しくつながった方というのも本当にたくさんいらっしゃいます。

おやまちサロンという取組がありまして、これも商店街にあるピアノ教室兼イベントスペースを借りて、外部の講師の方をお呼びして、SDGsをみんなで学んでいるときです。ここに17の目標の紙が置いてあるんですけれども、SDGsに詳しい方をお呼びして、自分たちのまちの暮らしでできることを考えるワークショップをやりました。

これはうちのお店ですけれども、子どもたちの放課後の現状であるとか、どんなことが必要なのかということを学んでいるときの写真です。結構今のホコ天の活動に生かされていたりもします。

これは、まちづくりのお勉強をみんなでしているところです。

こうやって、僕たちの活動というのは、この活動がなかったら出会わなかったであろう人たちが会える場をつくることから始まります。

そうしていると、あるとき、子ども食堂をやりたいという大人が現れて、おやまちを見込んでくれまして、いろいろ対話をしていく中で、すごくやっぱりいい取組だし、僕たちも、これまで出会っていなかった人たちが会える場がくれそうなので、一緒にやることになったんですけれども、なかなかできないですね。なので、まずは場を探しました。

これは、この図書館の目の前にあるパイ焼きさんです。日曜日がお休みで、月に1回、お借りできることになり、毎月第3日曜日に、コロナ前はやっていました。

場があっても人がいないと運営できないので、スタッフをどうやって集めようかと考えたんですけれども、先ほどのお酒を飲む会とか、お勉強する会とかで、たくさんのまちの大人たちとつながりを常につくっていたので、そこで声をかけたら、ぜひやりたいですとぼんぼん手が上がって、スタッフ集めはすぐ、うまくいったというか。今はちょっと活動

できていないですけれども、活動がスタートしてから至るところで声をかけていると、新しくスタッフになりたいという方が集まってきてくださるようになりました。

あと、皆さん御存じのように、世田谷って結構、都市農家さんがありますよね。尾山台の周りにもたくさんあるんですけれども、農家さんとのつながりもありましたので、販売できないような形の悪いお野菜を御提供いただけないものかをお願いしたら、快く、いいですよと言ってくださって、それをみんなで食べるということをしています。

この取組は、実は子ども食堂ではなくて、カレー食堂という名前です。なぜカレーかということなんですけれども、子どものためのものと思われてしまうのが嫌だったというか、僕たちのコンセプトとは違った。地域食堂というやつですね。コミュニティ食堂、地域食堂をやりたかったので、子ども食堂という名前をやめ、毎回、メインをカレーに絞っています。カレーとサラダ。なぜかという、毎回いただけるお野菜が違うわけですね。カレーって意外にどんな野菜でも入れられるんですよ。ダイコンカレー、サトイモカレーもやりました。夏はトマトとかをいただけるので、シンプルなトマトカレーとか。

とにかく僕たちの起点は、こういうことです。計画的に偶然をつくるとかというふうに言っていますけれども、とにかく人が偶然出会う、つながりをつくるということから全て僕たちは始めます。とにかくやってみようの精神でスタートして、偶然起こることを大切にするということです。

ただ、絶対に、この偶然が起きることを見逃さないというふうには決めています。なので、活動をスタートさせるときは、割とやっちゃえみたいな感じで、勢いでどんと行くんですけれども、その活動でいろいろなことが起きます。誰と誰が出会って、どういう会話があって、あの人がどんなことを話していたとか。それは絶対にすごく大切にするので、活動が終わった後の振り返りの時間を大切にしています。

実は、ホコ天の活動も、終わった後に学生たちが、今日こんなことがあったねとか、次回こんなことをやってみようとか、そういう話を実は記録として残してあります。

こんな感じで、たった4人から、発起人4人が、とにかくやってみようよということでスタートした、「おやまちプロジェクト」なんですけれども、少しずつ活動が増えていって、定期、不定期開催のものも含めて、ここに10個しかないですけれども、さらに今、増えています。

とりあえず一旦これで終わりますか。この後、コロナの話になっていきます。

○議長 ありがとうございます。

では、大体おやまちの、始まってから以降、どういう活動をしているかみたいなことをお話しいたきましたので、質問とか、コメントでも結構です。協働が起こる秘訣って何だろうみたいなことで、もしお気づきの点があれば、ぜひ教えていただければと思います。

学校関係で言うと、さらにいろいろありましたね。もともとリアル職業調べとか、小学校自体が商店街、それだけじゃない。商店街で授業で子どもたちが調べに行って、まちの仕事を調べたこともやっていたし、SDGsの話は、5年生の教科に入れるということで、実は、あのサロンは小学校の先生たちが総出で参加して、SDGsを学んで、今度の3月にSDGsの授業をやらなきゃいけないから、SDGsのカリキュラムをみんなで作ろうみたいな背景もありましたし、パナソニックの助成金をもらって何かやろうみたいな。今、「おやまちプロジェクト」のプロジェクトにはなっていないけれども、学校のプログラムの中に外部の人が協力しているものも幾つかあったりとか。

あと、今日まさかここを取ってくださっているとは知らなかったもので、中学校に聞いたら、貸してくれると雄太さんが言って。そうしたら、校長先生も来たいと言っていたんです。今日、用事があって来れなかったみたいなんですけれども、中学校も関係があって、おやまち部という部活を、中学校の校長先生がやりたいと最初はおっしゃっていたんですけれども、今、大っぴらに中学校の中で、ちょっとやりにくいものですから、東急の助成金のプログラムで、おやまち部という、運動部でも文化部でもなく、まちで部活をしようみたいな。中学生がやりたいことを存分にまちでやらしてもらおうみたいなことで、今、部員が4人？

○講師 4人です。はい。

○議長 2週間に一遍やるとか。そんな感じで、小学校だけではなくて、中学校との関係もありますね。いかがでしょうかね。感想とか質問でも結構です。全て中身が伝わったということでもないと思いますけれども、アウトラインは大体共有できたかと思いますけれども、いかがでしょうか。

○委員 今日見学したところでは大人がどんな活動か見えなかったんですけれども、地域の大人が参加するものをこれだけやっているというのは、ちょっとびっくりして、なるほどと思いました。やっぱりプロジェクトと言うだけのことはあるなと。最初は、何だ、子どもたち相手のなんて思っていたら、感心した。

○講師 ありがとうございます。

○委員 これだけのプロジェクトを管理しているメインは4人でということなんですか。

○講師 そんなことはなくて、例えば、カレー食堂はスタッフも何人もいるので、その方々で回っているんですよね。お金も自分たちで助成金を取るし、カレー、大人300円、子ども100円だったかな。そのお金と助成金でやっているの、実は余りタッチしていない。

僕たちがやるのは広報。「おやまちプロジェクト」の発信力を使ったり、また、信用力ですよね。今、一般社団法人にもなっていますし、小学校、中学校、商店街、町会、もしくは行政との連携。おやま치의冠をうまく活用している感じですかね。

また、定期的に開催するものと不定期のものがあるので、サロンとかシンポジウムとか、デザインプロジェクトみたいな少し大きなものは、僕とか先生とか、活動し話し合う中で、タイミングが来たらやるみたいな感じですね。

○委員 では、地域の人やりたいという思いを聞きながら実現する、サポート的な。その人たちで運営して行って、やってくださいという感じですよ。

○講師 そうだし、その活動を僕も楽しむ。だから、カレーを食べに行きますし。日曜日のお昼御飯を作らなくていいんですよ。うちの子どもたちは、うちの奥さんがこのサロンをやっているんですけども、すごいおいしいし、そこに行くと大学生もいれば、いろんな大人と話すことができるし。

このボードゲームの活動も、今、できていないんですけども、すごい楽しみにしてやっています。

○委員 課題解決を目的としないというのは非常にすごいなと思っているんです。そのコンセプトが。何でもやると、結局悪い癖で、こういう課題があるとか、先ほどのけがの問題もそうですけれども、大体そこに行き着くんですね。計画、目的があつてということじゃなくて、つながりが大事ということですよ。それから、計画的偶然を大事にしたいと。何かをやるとき、やっぱりしつらえが必要で、何が起こるか分からないけれども楽しんでみようというコンセプトだと思うんですね。

これからそういう話が出てくるのかなと思ったんですが、法人格を取られましたよね。

○講師 はい。

○委員 一般社団法人。これはすごいなと思ったんですが、法人格を取るというのは、結構計画とか、それこそ目的とかをどういうふうクリアしたのかということと、活動に当たって、法人格を取ることにメリット、デメリットというのが多分あると思うんですよね。

○講師 お答えすると、まず、なぜ法人化したかということなんですけれども、法人格を持っていないと取りに行けない助成金ってありますよね。取りに行きたいものがあつたと

ということで、法人格が必要だねというふうになったというのが、きっかけなんです。法人格を有すると、まちの中に対する信用力がやっぱり上がる。任意団体って、どこまで行っても遊びでやっているというか、真剣さが伝わらないということになってしまうので、法人格は取りに行ったということです。

法人化するときに、定款というか、作らなければいけないんです。目的とか書くんですけども、まちのあらゆる資源を活用して、暮らしを豊かにするみたいなことしか書いていないので、そんなにかちかちとした目的にせずに、そこは乗り越えたかなという感じがすね。計画とかも、そんなにない。お金のこととかは、もちろんちゃんとやっていますけれども。

○委員 あれは結構会計とか、そういうのは厳しいですよ。報告がね。

○講師 そうですね。会計士さんに聞いたんですけれども、僕たち、余り収益をしている事業をやっていないので、とりあえず1年目はそんなに厳しく見られなかった。2年目以降は分からないですけれども。なので、それまでは結構僕が1人で事務的なことをやっていたんですけれども、事務チームを新しく発足して、僕はむしろそこはノータッチで、事務チームが4人ぐらいいるので、今全部きっちりやってもらって、法人としての運営母体みたいなものをしっかりと整備はできたところですね。だから、毎週火曜日、30分ぐらい打合せしていますね。

では、時間ですかね。

○議長 そうですね。協力・連携・協働のメカニズムという資料を用意していただいて、「おやまちプロジェクト」を題材に、どのような形で地域と学校の連携・協働が実現するのかみたいなところを、ちょっと考えられるといいので、今のタイミングで、簡単にこの資料の御紹介をいただくことは可能ですか。

○事務局 では、資料1をまず御覧いただきたいと思います。連携・協働のメカニズムというのは、前回議長が発言された言葉を使っているんですけれども、前回、皆さんの意見交換の中で、よくよく考えると、連携・協働だけではなくて、その前に「協力」もあったりするというので、定義として、デジタル大辞泉から引っ張ってみると、協力、連携、協働とはこういうことですよと書いてあります。そして、共通して言えることは、個人、組織では達成できない課題に対して、他の力を合わせてやるのが、協力、連携、協働だったりすると考えられると思います。

どんなふうにイメージできるのかということで、これは私なりに考えたところなので、

正しいかどうかは、分かりません。何かやろうとしたときに課題があつて、これはできないので、他の力、それが前回も出ていましたけれども、ヒト・モノ・カネになってくるのかなと思っています。

協力というのは、色がついているニコニコマークは自分だと思っていただいて、白抜きが他人、個人、団体、組織ということになろうかなと思っています。

身近な活動例で言うと、世田谷はぐくみプロジェクトということを見ると、協力先が中学校で、内容とすれば、場所を提供していただけるということなんですね。これが連携・協働かというよりはもしかしたら、これはどっちにも入らず、協力関係になっているんじゃないかということで、例として書かせていただきました。

それから、相互の関係でウィン・ウィンになっているかどうかということも、こちらではウィンだと思っていても、相手先では実はウィンではなかったりということもあつたりするので、これがどういう関係なのかということも考えていくと。例えば協力と書きましたが、いやいや、実は連携だったり協働だったりするのかなというふうにもなってくると思うので、そこのあたりをこれから考える材料になっていくのかなと思っています。

前回、こちらのほうで資料を提供させていただいたA3判のもので、学校と地域のどちらかに矢印があつたりとか、双方向であつたり、どっちがいいとか悪いとか、双方向だからいいということではないかなというふうに改めて思ったわけで、協力だから、協働だからいいとかというレベルではないかなと思っています。

そんなことを考えていくと、より連携、あるいは協働、そして協力みたいなところのメカニズムとか、何かそういう形になっていくポイントとか要素とかというのが見えてくるんじゃないかなということで作りました。

さらに言うとも資料2ですね。

実は、こんなものもたたき台として作らせていただいたんですが、活動名、例えば世田谷はぐくみプロジェクト。目的は、こういうことですよ。関係先は、協力なのか、連携なのか、協働なのか、丸をしていただいたり、それから、関係先が学校なのか、地域なのか、どこなのかとか。支援内容は、こんなことをやっていただいているとか、それから、キーパーソンみたいな人がいるのか、いないのかとか、地域の顔の方ですとか、学習支援コーディネーターですとか、その中でウィン度ってどうなんだろう。左側が自分で、右側が相手ということになるんですけれども、ウィン・ウィンなのか、ウィン・ルーズなのか。ルーズ・ウィンとか、ルーズ・ルーズというのは余りないとは思いますが、あるいは、そ

の他、どうなのか。それから、こういう活動をしていく中での効果って、こういうところにあるよねとか、こんな課題があるよね。さっき課題なんていうのはあったんですけども。それから、その他でこんなことがあるよというようなことを、さっきの図から考えてみて、それぞれ皆さんが御経験している、今、あるいは活動しているもので落とし込んでいくと、実は、第3回目の会議の中での意見交換の素材になってくるんじゃないかなということで、もしこういう資料が参考になるというのであれば、今日少したいていただいて、もっとあれが欲しい、これがいいんじゃないのということで御意見いただければ、改めて第3回目までに皆さんに送らせていただいて、第3回目までにこれを書いていただいて、意見交換の素材になればいいなと考えています。

○議長 ありがとうございます。「おやまちプロジェクト」だけでなく、多様な連携があり、世田谷区にあるいろんな事例を見ていきたいので、紹介してくださいというのが、このシートの狙いなんだと思います。

それに当たって、前回、本当に気づきだったんですけども、協働とかと言うと、すごくがちり一緒にやっているみたいなもの以外は目に入らなくなってしまいうんですけども、よく考えてみると、地域と学校って、何かそんなに大上段に構えなくても、いろんな水準の、日常的な協力関係みたいなものが、いっぱいありますよね。それがやっぱりすごくいろんなことの前提になっているんじゃないかと思いますので、そういうことも見落とさないようにするために、協力とか連携とか協働、いろんな水準の関わりがあるよねみたいなことを、ちょっと整理してみると、いろんなことが見えやすくなるのかなというようなことだったかと思います。

これは参考にして、最後にまたちょっとお話を聞かせていただければと思いますけれども、協力とか連携とかを少し踏まえつつ、残りのこの半年とか、この1年間どんな現状になっているか、「おやまちプロジェクト」のお話をさらに聞いていただきたいと思います。

では、お願いいたします。

○講師 ありがとうございます。

コロナの中でどんなことが起きてきたのかということを再度お話しして終わりたい。10分かけないぐらいで行きたいと思います。

先ほどお伝えしたように、僕たちは、活動がなければ出会わなかったであろう人たちが出会う場所をつくるというところから始まるんですけども、リアルで会っては駄目と言われて、コロナがやってきて。活動の一番の起点をそがれたんですけども、幸い、Z o

o mに代表されるようなオンラインツールを使いこなすことが、僕たちはできるようになったので、何かオンライン上でも出会いがつかれないかなと思って、4月20日からオンライン上の居場所づくりみたいな取組をやっていました。

これも特に目的がなくて、Z o o mを毎日11時から7時まで、とにかく開け続けるというのをやりました。4月20日に。もちろん研究室の学生たちに協力してもらったというか、かなり彼らが頑張ってくれました。

そうすると、いろんな過ごし方を皆さんします。要は、ミーティングツールなので、目的のある会議が行われたりとか、飲み会なんかも結構はやっていましたけれども、誰がどんな使い方をしてもいいという場所って、多分なかなかなかったと思うんですよね。そうすると、もう本当にいろんなことをやる人たちがいました。

特によかったのは、一人暮らしの大学生とか、社会人の方もそうですし、または、私立の中学校に通うことになったんだけど、友達は一切いないみたいな。学校が始まっていないから学校の友達がいないんですよね。そういう人たちの居場所というか。人間って人間の気配をどうやら感じたいらしくて、誰かとしゃべるとかじゃなくて、何となくそこに人がいる気配があるだけで、すごく心がポジティブになっていくんだと思うんですよね。きっと。これをやっていて分かったんですけども。何かそういう、人の気配を感じたい人がたくさん来ていました。

これまでのリアルな活動というのは地域性かなりありますけれども、場所にとらわれないので、全国のいろんな方とつながることができたというのも1つのメリットだったかなと思っています。

6月に入ると公立小中学校の分散登校が始まりましたよね。あれに合わせて歩行者天国の活動を少しずつ再開しました。リアルな活動もしながら、それをZ o o mで配信して、全国どこからでも見ることができる。この活動に参加することができるというようなこともやってきました。

あとは、ぜひ御紹介したかったのが、先ほど何度もしゃべっているカレー食堂なんですけれども、すごくいい進化をしていて、みんなで集まって食事することができないので、では、おのこの家で御飯を作って、Z o o m上でみんなで集まって食べればいいじゃんみたいなことなんですけれども、農家の方に御協力いただいて、お野菜を提供してもらいました。第3土曜日の歩行者天国の時間に、そのお野菜とレシピを皆さんに無料配布するんですよね。多分30食分ぐらいあったと思うんですけども。で、次の日の、日曜日の午前

中におのおので作っていただいて、12時になったら、このZ o o mに入る。そうするとみんな御飯が食べられるということをやりました。

カレー食堂のスタッフも、要は分断されちゃったわけですね。リアル活動がなかったけれども、このオンラインを使ってうまく活動したら、スタッフ同士もうまくコミュニケーションが取れるようになって、4月とか5月の最初の頃は、夏には活動が再開できるんじゃないかと思っていたんですよ。でも、これはどうやら、しばらく活動できないというふうになったので、もういっそのこと、次、リアルで活動ができたときのために自分たちで野菜を育て、カレーを作って皆さんにおもてなししよう、御提供しようというふうに、スタッフの中で、これは僕は全然しゃべっていないんですよ。本当にスタッフの中で、そういうふうに勝手に話が進化して行って、お野菜を提供いただいている農家さんに話をしたら、この農家さんの農園をお手伝いするところから活動が今、始まっています。

この方はトラクターに生まれて初めて乗っているんですけども。こんなことがありました。

先ほどお話しされていた、おやまち部という取組で、これはまさに小学校とか中学校の校長先生にお話をしっかり通して、むしろ、おやまち部というアイデアは中学校の校長先生のアイデアです。東急の助成をいただいています。

ここに書いてあるように、まちの課題解決とか、まちを舞台に自己実現する、マイプロジェクトを行う部活動です。この活動を通して、まちのいろんな大人たちの協力を得ることで、そもそもプロジェクトを実現させるためのプロセスに学びがあると思いますし、その途中途中で出会う大人たちとつながりができていくと、全くこれまでと違うまちでの暮らしが、この子たちができるようになる。また、大人もうれしいですね。子どもに関わったら。そういうことを願ってやっています。

マイプロジェクトを考える前に、まずはまちのことをもっと知らなきゃいけないよねということで、まず、まち歩きをするところから始まったんですけども、ここも、中学生ぐらいになると、自分たちでどんどんアイデアを出してくれて、ただまち歩きしても面白くないから、今、インスタ映えってあるじゃないですか。まちの中に魅力的な場所を見つけて、それをSNSで上げたいと子どもたちが言い出したんですよ。おやまち部の公式インスタグラムがありまして、なぜか第1回目の投稿がこれなんですけれども、野毛公園にある何だかよく分からない動物の遊具ですね。これが面白いと言って、今、上がっています。

子どもなので、全部ゼロから、はい、どうぞ、やってくださいと言っても大人みたいにできないけれども、少し下地を用意してあげれば、どんどんそこに絵をつけていく。絵の具みたいに。それが子どもたちと一緒にやっていて、とても発見でした。

10月から活動をし始めたので、まだ始まったばかりなんですけれども、今ではここにいる4人の中学生がおやまち部のメンバーです。

なぜこの4人なのかということなんですけれども、この「おやまちプロジェクト」、3年間ぐらい活動をしてきて、ホコ天の活動とかいろんな活動に来ていた子どもたち。さっきのワークショップとか。なので、親御さんとも密な関係ができている子どもたちなので、親御さんも、「おやまちプロジェクト」だったら、ぜひ参加させたいですということで、参加してきてくれています。

3月までは試験的ということもあって4名で活動をして、4月以降、本格的に部員を増やしてやっていこうかと思っています。

最後は、この写真で終わりたいと思うんですけれども、これは1年半ぐらい前ですね。今年の卒業式は簡易的な卒業式だったので、できませんでしたけれども、今の中学校2年生たちが小学校を卒業するときの、卒業式の日の写真なんです。卒業式はちゃんと体育館の中で粛々と行われました。その後、謝恩会に行って、ちょうど尾山台に帰ってくる時間が、この歩行者天国の時間なので、この時間に子どもたちに歩行者天国をちょっと練り歩いてもらって、最後、集合して、まちの大人たちに向かって、皆さんに見守られて僕たちはここまで大きく成長することができました、ありがとうございましたというふうに言って、大人たちが子どもたちの門出を祝福するというような、おやまち流卒業式みたいなものを執り行います。

こういうことができたのも、ふだんからこのまちと学校との連携がしっかりできているということですし、もっと言うと、協働とか連携って大上段に構えるのではなくて、本当に日々の小さなつながりの積み重ねで、例えばこういう大きなイベントができているので、互いをよく知ることですよね。ふだんからしっかりコミュニケーションが取れていれば、ああ、それだったらやっておくよ、みたいな関係性ができるので、信頼関係さえできていれば、こういったことが行えるんじゃないかなんていうふうに思って、さっき話を聞いていました。

こんなところで終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

○議長 ありがとうございました。

あと15分ちょっとぐらいディスカッションしていきたいと思います。

質問など、御意見など、ぜひさらにもお願いします。

「おやまちプロジェクト」は、ごく普通に学校と地域と一緒に子どもを育てたりとか、あるいは、大人のつながりをつくったりみたいなことが起こっていて、何か特殊なことがあるわけではなく、ごくごく当たり前に、別々のセクターの人が一緒に何かをするみたいなことが動いている。動き始めていると言っているのかもしれませんがけれども、何で普通にそういうことが起こらないのか。それを隔てるのは、どういうところがポイントなのか、あるいは、実は、ほかの地域でもいっぱい起こっているのかもしれませんが、何かがきっかけになって、そうになっていないのかもしれませんが、その辺の皆さんの御経験とかも含めて少し議論できるといいかなというふうに思っています。

○委員 自分のところと比べると、尾山台は奇跡的な立地。駅があって、商店街がある。それと、小学校、中学校がちょうど商店街の横にあって、皆さんの活動区域がちょうど一致しているというところが奇跡的だったんじゃないかなと思うんですね。ほかの地域だと、商店街は学区からずれていたり、小学校と中学校が全然学区がずれていたり、はたまた駅は変なところにあったりと、皆さんの活動が一致する条件が、なかなかうまく融合していないので。ここは聞いていて、本当にそれが全てが一致した、奇跡的な場所だったのが、うまく盛り上がったんじゃないかなと思いました。

○議長 なるほど。では、学校関係は学校関係、商店街は商店街、家と駅との往復の人というのは、余りすれ違わないみたいなこと。

○委員 そうそう。このエリアがね。ちょうどこう、うまく。だから、皆さんの気持ちが一貫しやすかった。

○委員 そこにしかも大学があるというのが非常にいいなと思いました。

小学校とか中学校は比較的駅からは近いんですか。

○講師 （商店街の）1本裏、2本裏に小学校、中学校があるので。小学校と中学校も、すごい近いんですよ。

○委員 小と中の学区も、そんなずれていないんですよ。

○講師 そうですね。

○委員 おや小の子は、みんな尾山台中学校という感じですよ。

○講師 そうですね。はい。

○委員 そこも大きいよね。

○委員 そこは大きいですね。みんなばらばらになっちゃう。

○委員 下高井戸も同じように小学校と中学校が近くて、日本大学があつて、なおかつ都立の高校まであるんですけれども、そういうことがなかなか起こりづらくて、やはり中心になって声をかけて、そして、まちを真剣にやっというエネルギーを持っている人ってすごく大事な。巻き込んで始める。自分がヒーローにならないと言うと変なんですけれども、何か広げていくとか、課題解決ではなくというような、まちづくりを勉強されているとか、そういう方ってなかなかいないので、もちろん環境もそうなんですけれども、やっぱり最初に、スターター、そういう方が大事だなと思いました。あと、若いという。

○講師 そうなんですかね。

○委員 どうしても商店街の方って重鎮の方が……。ということもあるので。

○委員 そこは大きい。

○委員 ねえ。そう思います。

○講師 結構上の人に怒られたりしますけれども。

○委員 地域の方々が、自分がやろうという気に、すごくなつてくださっているんじゃないかなと思いました。みんながこのまちをよくすることを自分のこととして考えていらっしゃるんじゃないかなと。もちろん講師も含めてなんですけれども。

最初は、今日見学をしたところで子どもたちの様子を見て入ったので、そういう方向かと思つたら、そうじゃなくて、関わっている大人の方が、すごく動いていらっしゃるプロジェクトだなと思いました。

○委員 こういうのは義務感とか責任感が伴っちゃうと駄目なんですよ。

○委員 そうですね。皆さん自分から動いていらっしゃるように見えます。

○委員 楽しむというのがね。あとは自分から楽しんでいくというので、やっぱり楽しくなきゃ駄目なんですよ。何をするにもね。

○委員 楽しそうでした。

○講師 そうですよ。

○委員 あと、やっぱり、ここで生まれて育っていらっしゃるわけですね。

○講師 はい。

○委員 自分のまちを非常にいいと認識をされて、とても好きであるということがある。それが活動の源にあるわけで、これはやっぱり、次の世代というところでも、一番そうい

う思いがあるということは、すごく大事なことはないかなと思うんですね。また、うちのほうの商店街も、商店街と住宅は、一致してあるんですけども、例えば道がすごく狭いんですね。昔の農道が道になったようなところで。でも、ここの尾山台を見ると、すごく整備されて、例えば商店街でという、商店街の人たちは自分たちの店をやらなきゃいけないから、なかなか時間が取れないとか、なかなか協力が得られなかったり。そして、では、ここを通らなかったら、どこを通るのみたいなことで、回避する道がなかったり。

でも、ここを見ていると、ホコ天のところに車がちゃんと通り抜けるスペースがあって、商店街でも広過ぎずといって狭過ぎずという、ちょうどいいスペースであった。これが余り広過ぎちゃうと、また違うと思うんですよ。ここはそういういい条件が非常にそろっている気がしましたね。

あとは、若い方でそれに関わって、自分のまちを好きだ、それが伝わっていく。その辺がすごく大事なことなんでしょう。

条件が本当にそろえば、うちのほうも何かできないかなと思って伺っていたんですけども。羨ましいです。

○委員 皆さんおっしゃるとおりに、駅から近いところに学区域があり、大学があり、こうやって出会いがありということでできたんだというのが、すごく分かります。

やらなきゃいけないことではなく、やりたいことということで、それぞれが、私たちこれができるわとか、今、10個、そういう活動をしているのが本当にすごいなと。

私は烏山なんですね。千歳烏山の商店街が、すごい立派なんですけれども、なかなかそういうふうな活動も、また学校も商店街が近くない。1つは近いなんですけれども、学び舎の中学校との連携も難しいとか、本当に条件を言ったら切りがないんですけれども、では、私たちはどこにアプローチして、どういうつながりができて、どんなコミュニティーができるかというのを、今後、世田谷の区内で、ここを目指すというよりは、自分たちのできることを考えていくモデル。

ただ、みんなこれを見ると、びっくりしちゃって、うちには無理ですと言うかもしれないけれども、どこができるかなというのを、またヒントをいただきながら、やっていったらいいのかなんていうふうに。

ところで、畑もあるんですか。この近所に。

○講師 畑はいっぱいあります。駅から5分、10分歩いたら、もうありますね。

○委員 そうなんですね。だから、余り団地とかマンションとかじゃない感じですかね。

この辺は。

○講師 そうですね。

○委員 きっと、もうずっと住み続ける、おうちを買った人たちが住んでいたりすると、さっきの子どもたちが大人になったときのことを想像したりとか、そういうこともあるのかなと思いました。あと、どういう人がいるのかなと、講師は御存じなんですか。

○講師 全然。

○議長 条件的なことと言うと、実は、自然になったというよりも、もともと区画が整理されているのは、100年ぐらい前ですかね。ここら辺の地主の人たちが、お金を出し合って整備をしているんですね。それが珍しく碁盤の目をつくっている。80年代に講師のお父さん世代の人たちが石畳を……。

○講師 おじいちゃんですね。

○議長 おじいちゃん世代の方が石畳の整備をしてというのが、それは、たまたまというよりも、前の世代、前々の世代の方が、実はそういうことにしっかり投資をしてきたということも一因としてはありますよね。

だから、こういうのを知っていると、何か勝手なことをできなくなってくるというか、この先どういうふうにつくっていかなくちゃいけないのかみたいなことを受け継いでいらっしゃる商店街の方、まちの人というのは、やっぱりそれを受け継いでいるという。そういうマインドを持っている方は実はいらっしゃるなというふうに私は感じますね。

どのまちにも、そういう思いを持っていらっしゃる方は絶対いらっしゃると思います。尾山台も条件がいいとおっしゃるけれども、「おやまちプロジェクト」が起こる前は、別に、ある意味いいものはいっぱいあったけれども、でもやっぱり何も起こっていなかったということも事実ではあるので。そのときには条件がいいねと誰も言っていませんでしたよね。

○委員 きっかけなんですよ。

○委員 今あるものを使ってということで進んでいらっしゃるの、新しく何かを作って人が集まってきたわけではないですもんね。

○講師 はい。

○議長 そうですね。本当におっしゃるとおり。だから、というのが真理だとすると、どのまちにも何かあるものが、こうつながったときに何かが起こる可能性があるということですよね。

○委員 きっかけだったんでしょうね。きっと。

○講師 そうだと思います。

○委員 きっかけですよ。尾山台を愛している人たちが、こんなにもいたんだとおっしゃいましたけれども、ほかのまちでも、みんな住んでいる人は愛しているんですよ。

○講師 絶対そうですよね。

○委員 でも、言う場所がないんですね。みんな黙っているだけで。それをどこかで、じゃあみんなでという場所をつくってくると、そのまちが好きな人がどんどん自然に集まってくる。そのきっかけがなかなか難しいね。

○議長 確かに。

○委員 あとは、このまちと同じように整備をできるかと言ったら、できませんから、ある中で、どうやったらできるかということですよ。だから、まちの好きな人たちがどういうふうに集まって、どういうふうにそれを生かしてやっていけるかということだと思うので、学校が近くにあるとか、商店街が一緒にあるか、それは、もうそれぞれの場所の条件が違うわけですからね。

○講師 そのとおりだと思います。

○委員 できることを探っていくしかない。

○委員 お伺いして、やっぱり人なんだなというのをすごく思って、私は前、上野毛に住んでいたんですね。だから、大井町線沿線のこの辺は、割とよく分かっているつもりなんですけれども、尾山台の近辺を考えたときに、九品仏とか等々力とか上野毛とかがあって、駅のところに商店街があって、こっちへ行くと環八になってとか。上野毛も等々力も九品仏も、学校も割と近くにあって。

ないのは何かな、その3つにと思ったら、大学はないですよ。だから、要は、大学があったのはすごく大きいということだったと思うんですけども、最初にアプローチをかけられたところで。ただ、尾山台にはないけれども、等々力には等々力溪谷があるし、九品仏には浄真寺があるとかなので、やっぱりそこで1つ何かアクションを起こす人がいるかないかによって違って来るんだろうなと。

だから、例えば隣の駅で言ったら、大学とはつながらなかったかもしれないけれども、その土地ならではの何か別の素材がきっとあるんだろうし、そこをどう探していくか。あるものを使っていくということ、やろうと思う人がいるかないか。その人が、1人じゃできないとおっしゃっていましたが、ネットワークをいろいろつくって、その人たちが今度また、やるかやらないかというのが大きいんだろうなと。やっぱり人なんだな

というのをすごく思いました。

ボランティアと呼ぶのか、ちょっと分からないですけども、結局、できる人ができることをやれる範囲で楽しみながらやるというのが、物事が続いていく秘訣なんだろうな。そこにぴったり今、はまっているんじゃないのかなと思いました。

学校の関わり方で、今、実際、教員がどんなプロジェクトにどの程度関わっているか。というのは、教員って、今もう6年ぐらいしか学校にいらなくて、もし学校の教員が何か自分たちが、例えばまち探検に行くときに、いろいろしていただけたらとしたら、学校の関わり方としては余りにももったいないと思うので、教員のほうからアプローチしていく、何かやっていることなんかがあれば、教えていただけたらなと思うんですけども。そこが結構大きな、学校の壁というか、乗り越えなきゃいけないハードルなんだろうなと思うんですね。

○講師 小学校で言うと、校長が代わってから関わりは少なくなってはしまいました。結構いろんな学年の先生たちから連絡が来て、あんなことやりたい、こんなことやりたいというのがあったんですけども、今、コロナもあって動きづらいというところもあると思うんですけども、それはちょっと今、正直、小学校に関して言うと、何かこちらのやるときにチラシをまいてもらったりとか、おやまち部とかをやるときに話を通して了承を得ておくとか、ちょっとそういう感じになっていますけれども、ただ、一方で、この間の話ですけども、リアル職業調べのときに、「おやまちプロジェクト」のつながりで、何人か先生と一緒にいたり、そういうつながりは、脈々とあるかなという感じはありますね。

また、今、中学校のほうで、ちょうど70周年で、式典とかはできなかったんですけども、校長先生もすごく、「おやまちプロジェクト」のことが大好きなので、70周年のときにまちの歴史の話をしたりとか、いろいろな人を紹介したりとかしてというのは、ありますね。ただ、教員の先生とというと、そっちも余りないかなというところですね。

○委員 教員をやっている身として大きな反省で、どうも学校って、自分たちが欲しているときに都合のいいように協力をお願いし、一方で、学校から何かを提供することはなく、ひたすら受け身という。これは教員の悪い癖だなと思うので、本当は、学校って、やっぱりずっとその土地に残るものだから、ある意味、コミュニティーの核になっていかなきゃいけないと思うんですけども、なかなかそれができない。だから、今日いろいろ伺ってすごく刺激にもなったし、今のところを、より深く反省しつつ、こういう場でいろいろ勉強していきたいなと。

○委員 学校って場所があることが大事で、商店街とかがないところにとっては、学校の建物とか、校庭とか、そこがまさに一番大事なところで、校長先生が替わると方針も少しずつ違うので、難しいかとは思いますが、そこに活動する人たちさえいれば続いていくのかなって。

○委員 人材は結構いるんですよね。世田谷区は。いることはいるので、どういうふうに動くか、動かすかということなんでしょうけれども。

○議長 どうせ地域の中の大学、キャンパスの中の教室の中でしゃべっているのを、たまにここで作っているだけみたいな、そういう親しみやすさみたいなものが、きっとあると思うんですよね。だから、そういうのを建物の中に閉じてやるのではなく、大学も小学校、中学校もそうですけれども、それがまちにしみ出て行って、何かいろんなものがオーバーラップしていくみたいなことがすごい大事なんだろうなと思いますし。

○委員 だから、尾山台地域みたいに物理的な条件と、あとは、もう人ですよね。それがうまくマッチングすると、こんなすばらしいプロジェクトができるでしょうけれどもね。

○講師 まだまだですけれども。

○議長 時間も迫ってまいりました。

今日の議論はここで終了しますが、引き続き次回以降、また議論を深めていきたいと思っています。まずは今日は本当にお忙しい中、大変貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。（拍手）

今日の議題はこれで終了となります。本当にありがとうございました。